

重点取組分野	令和 4 年度		総括	重点取組分野	令和 5 年度	
	具体的取組	自己評価結果			具体的取組	自己評価結果
授業改善	①単元や一単位時間で育成を目指す資質・能力を明確にした授業づくりをする。本時のめあての確認と振り返りの時間を取り入れ、子どもが主体的に学習を進められるようにする。②重点研究テーマを「自分の思いをもち、関わり合う子どもの育成」とし、生活科、総合的な学習の時間を中心に、相手や目的を意識して言葉を選択しながら人と豊かに関わる力を育成する。	①T.TIに関してはまだ5年生のみの実施のため、4.5.6年生に拡大したい。②生活科、総合的な学習の時間において、全学年で問題を発見し課題を解決する学習を展開することができた。	B	授業改善	①教育課程全体で育成を目指す資質・能力のつながりを意識した授業づくりをする。そのために各学年の年間計画表などを使って親和性の高い単元とそのつながりを明確にする。②重点研究テーマを「自分の思いをもち、関わり合う子どもの育成」とし、国語科を中心に相手や目的を意識して言葉を選択・吟味しながら人と豊かに関わる力を育成する。	
道徳教育	①豊かな心の育成を目指して、道徳科を要として学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育を推進する。②道徳科年間指導計画に沿った、全学級の道徳科授業公開を年一回以上実施する。③自分の思いを書いたり、話したりする活動の中で自分自身を見つめたり、なりたいたい自分をイメージしたりすることができるようにする。	①5月に道徳研修会、11月に道徳科授業研究会を実施し、教育活動全体に係る道徳教育の視点を共有した。②授業参観、土曜参観で各学級年一回以上の道徳科の授業公開を行った。	A	道徳教育	①豊かな心の育成を目指して、道徳科を要として学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育を推進する。②道徳科年間指導計画に沿った、全学級の道徳科授業公開を年一回以上実施する。③自分の思いを書いたり、話したりする活動の中で自分自身を見つめたり、なりたいたい自分をイメージしたりすることができるようにする。	
健康教育	①家庭と連携し、規則正しい生活を送ろうとする姿勢を培うとともに、食育や歯科保健教育を実施する。②新体力テストに基づき、学校全体の課題を明確にする。その課題を解決するための運動を考え、実施する。	①「生活振り返りカード」の活動を通して、「早寝・早起き・朝ごはん」の習慣が「よくなった・ほほえんだ」と回答した児童が9割を超えた。②食育全体計画に基づいた指導を栄養教諭と連携しながら行うことができた。むし歯予防はPTAと連携した活動が検討されている。	B	健康教育	①家庭と連携し、規則正しい生活を送ろうとする姿勢を培うとともに、食育や歯科保健教育を実施する。②定期的「なわとび集会」を行うなど、楽しく体を動かす機会を設定する。	
自分づくり教育(キャリア教育)	①地域で体験的に学ぶ機会を積極的に設け、他者との関わりの中で自分の思いを表現しながら一人ひとりが自己有用感を高めるようにする。②「自分づくりパスポート」を活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返りたりして、子ども自身の姿や成長を自己評価できるようにする。	①第3学年では、地域の商店街等の協力による体験的な活動を行い、ほとんどの児童が「認められる喜びを感じた」と振り返りに書いていた。②「自分づくりパスポート」に子ども自身の振り返りを蓄積し、年度末に見直しで自己の成長を自覚できるようにした。	B	自分づくり教育(キャリア教育)	①地域で体験的に学ぶ機会を積極的に設け、他者との関わりの中で自分の思いを表現しながら一人ひとりが自己有用感を高めるようにする。②「自分づくりパスポート」を活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返りたりして、子ども自身の姿や成長を自己評価できるようにする。	
いじめへの対応	①日常に潜むいじめについて積極的に認知し、子どもの心情に寄り添うことを徹底する。②月1回以上定期的にいじめ防止対策委員会を実施し、認知された案件の経過確認をいじめに行こうと再発防止に努める。③年3回のいじめ防止研修を実施して、全教職員のいじめに対するアンテナを高くするとともに、年3回の児童アンケートにより些細な変化を見逃さない体制づくりをする。	①いじめ防止対策委員会の定例会で、各学年から進捗状況報告を行い、認知された案件はすべて3か月以降に解消した。②夏休み中の研修に指導主事を招きブロック研修を行った。各学年の具体事例を基にしたケーススタディを一つずつすることで、学校全体の対応バリエーションが増えた。	A	いじめへの対応	①日常に潜むいじめについて積極的に認知し、子どもの心情に寄り添うことを徹底する。②月1回定期的にいじめ防止対策委員会を実施し、認知された案件の経過確認をいじめに行こうと再発防止に努める。③年3回のいじめ防止研修を実施して、全教職員のいじめに対するアンテナを高くするとともに、年3回の児童アンケートにより些細な変化を見逃さない体制づくりをする。	
人材育成・組織運営(働き方)	①5年次以下の教職員を中心にメンターチームを組織し、ミドルリーダーが講師となって月1回の活動を継続して行う。②週に1回、教務会及び学年主任会を行い、ミドルリーダー等が全体を見通して学校運営していく場を設定する。③ICTを活用した事務の効率化や情報の共有を図るとともに、全職員の組織的な働き方改革につなげる。	①校内のミドルリーダーが講師を務めるメンター研を毎月1回開催した。毎回5名以上が参加できた。②教務会と学年主任会を週1回の定例会とした。そこで共有した情報を各チーム内に伝達する仕組みが整った。③ICT活用研修会を行い、操作方法、効果的な活用事例の共有化を図った。	A	人材育成・組織運営(働き方)	①5年次以下の教職員を中心にメンターチームを組織し、ミドルリーダーが講師となって月1回の活動を継続して行う。②週に1回、教務会及び学年主任会を行い、ミドルリーダー等が全体を見通して学校運営していく場を設定する。③ICTを活用した事務の効率化や情報の共有化を図るとともに、全職員の組織的な働き方改革につなげる。	
地域学校協働活動	①地域の方々による下校時の見守り活動について、学校運営協議会で協議して、安全対策の充実を図る。②〇〇川クリーンアップ作戦、地域防災づくり等に対して地域学校協働本部が協力できることを考え、児童と職員が積極的に参加できるようにする。	①学校運営協議会で、下校時の見守り活動地点の見直しをした。②〇〇川クリーンアップ作戦について、児童と協力しながら広報活動を行うことで昨年度よりも参加した児童が20%増えた。	A	地域学校協働活動	①地域の方々による下校時の見守り活動について、学校運営協議会で協議して、安全対策の充実を図る。②〇〇川クリーンアップ作戦、地域防災づくり等に対して地域学校協働本部が協力できることを考え、児童と職員が積極的に参加できるようにする。	
特別支援教育	①一般学級と個別支援学級の連携強化に向けて、合同打ち合わせを積極的に行い、学年通信と個別支援学級通信の運動を図る。②個別支援学級の環境整備を全職員で行い、ユニバーサルデザインについて理解する。③障害を理由に、授業に参加できない状況にないか常に教育活動を見直し、誰一人取り残さずことなく、授業に参加できるように取り組む。	①各学年の打ち合わせに、週替わりで個別支援学級担任が参加し、情報共有が密になった。②夏休休業中に個別支援学級の環境整備を職員作業で行い、環境整備を行う日を半日設け、ユニバーサルデザイン教育に配慮した環境整備について学び各教室に反映させることができた。	B	特別支援教育	①一般学級と個別支援学級の連携強化に向けて、合同打ち合わせを積極的に行い、学年通信と個別支援学級通信の運動を図る。②個別支援学級の環境整備を全職員で行い、ユニバーサルデザインについて理解する。③障害を理由に、授業に参加できない状況にないか常に教育活動を見直し、誰一人取り残さずことなく、授業に参加できるように取り組む。	
児童生徒指導	①「学校のきまり」が、現在の社会情勢に沿うものであるか検討し、「学習スタンダード」と「生活スタンダード」に分け、分かりやすい表現に直すとともに、子どもたちの考えたスタンダードを取り入れる。②職員会議内に児童理解の内容を定例化し、児童の状況を共通理解する。③IY-PAセメントを活用し、多面的な児童理解と具体的な支援・指導を実施する。④不登校児童、家庭へのこまめな連絡をし、学習の支援の在り方を探り、学びが継続できるようにする。	①「学校のきまり」を全職員で見直した。児童代表委員会が中心となり、児童自らが学校生活上の課題を考え、スタンダードの見直しに取り組んだ。②職員会議内の児童理解の内容は定例化した。児童の状況は全職員で共通理解し、指導に当たった。	B	児童生徒指導	①「学校のきまり」が、現在の社会情勢に沿うものであるか検討し、「学習スタンダード」と「生活スタンダード」に分け、分かりやすい表現に直すとともに、子どもたちの考えたスタンダードを取り入れる。②職員会議内に児童理解の内容を定例化し、児童の状況を共通理解する。③IY-PAセメントを活用し、多面的な児童理解と具体的な支援・指導を実施する。④不登校児童、家庭へのこまめな連絡をし、学習の支援の在り方を探り、学びが継続できるようにする。	
多文化共生	①外国の言語や習慣、食べ物等を紹介することで、全校児童の多文化共生の取組を推進する。②外国につながる児童の支援のため、国際交流ラウンジやボランティア団体などの関係機関との連携を図る。③外国につながる児童一人ひとりの状況を的確にみとり、「特別の教育課程」を編成し、実施・評価・改善をしながら、様々な角度から日本語能力の向上を支援する。	①外国の文化を紹介する集いを年2回開き、多文化に対する理解を深めた。②国際交流ラウンジと連携を取りながら、外国につながる児童の支援を充実させた。③「日本語指導カリキュラム」を作成し、日本語指導を充実させた。	B	多文化共生	①外国の言語や習慣、食べ物等を紹介することで、全校児童の多文化共生の取組を推進する。②外国につながる児童の支援のため、国際交流ラウンジやボランティア団体などの関係機関との連携を図る。③外国につながる児童一人ひとりの状況を的確にみとり、「特別の教育課程」を編成し、実施・評価・改善をしながら、様々な角度から日本語能力の向上を支援する。	
ブロック内評価後の気づき	「子ども像」を共有したことにより、子どもの成長を同じ視点からとらえることができた。授業研では「言語活動の充実」というテーマを設定したことで、視点を絞った意見交換を行うことができた。教務主任会では、各行事の確認の他に各校のスタンダードがそろっていないことが話題となった。来年度に向けて検討していくことが確認された。会議会場をもちまわりすることで、各学校の状況を把握することができ、相互評価への視点をもちつこともできた。合唱コンクールへの6年生の参加が実現できたことがよかった。今後も継続していきたい。			ブロック内評価後の気づき		
学校関係者評価	地域行事への児童の参加が増えたことは大変よかった。学校と保護者、地域が一体となって子どもの成長を見守ることができている。防災訓練を学校の避難訓練と一緒に行ったこともよかった。防災意識の向上は学校と保護者、地域の協力が不可欠である。今後も充実させていきたい。栄養教諭が全学年で行った食育の授業はよかった。この内容は保護者に伝えていくことが必要ではないだろうか。PTAと協力できることはしていきたいと考える。学校が行っているよい取組を、もっと発信していく必要があるのではないだろうか。			学校関係者評価		
中期取組目標振り返り	「まちとともに歩む学校づくり」をテーマに掲げながら、日々の授業、学校行事、地域行事が連携して進み始めることができた。創立120周年に向けて着実に実績を積み上げていきたい。基礎・基本の定着については今後も課題であり、引き続き取り組んでいきたい。問題解決的学習の充実については、重点研との運動を図り、まちの「人」と一体となった単元を立ち上げていきたい。学校運営協議会の設置に向けて、大きく前進した一年であった。来年度中の委員会開催に向けて最終調整を進めていく予定である。			中期取組目標振り返り		